

般若寺出土軒瓦の検討

— 正倉院文書中「大般若寺」との関連から —

平松 良順

1. 序言

大和国の北端、北山に位置する般若寺⁽¹⁾は飛鳥時代創建、聖武天皇創建といった伝承があるものの、従来は平安時代に創建されたと考えられている。しかしこの般若寺境内から奈良時代の軒瓦が出土していることは識者に注目されながらも等閑視されてきた観がある。これら瓦類は後述するように奈良時代の仏教政策を考える上で重要な意味を持つ。本稿では般若寺出土の軒瓦を紹介し、そこから導き出される古代史上の意義について考察する。

2. 般若寺の歴史

般若寺の立地は山城と大和をつなぐ上津道（奈良街道）沿いの国境の峠、北山と呼ばれる佐保丘陵の東端に位置し、南に奈良盆地を眺望できる立地である。また平城京東七坊（東京極）大路はこの上津道を取り込んで設定される。般若寺は奈良街道に向かって西面する楼門（国宝）を開き、寛文年間建立の本堂の他に宋人工石伊行末らが建長5年(1253)に建立した十三重石塔(国宝)や中世の経蔵(重要文化財)などの伽藍が配置される。特に石塔には解体修理によって数々の奉納品が確認されており、伽藍の中心的存在と考えられる。

般若寺の創建過程は不明だが、寺伝などは天平7年(735)聖武天皇創建と伝え、飛鳥時代に行基によって建立されたとも伝えられる。これまで般若寺が記録上で確実に初見されるのは貞観5年(863)と考えられていた(史料9)。正史ではないが『平家物語』にも般若寺の記事がある(史料11・12)。『平家物語』が物語であることを割り引いて勘案する必要は言を俟たない。般若寺は治承の乱によって、東大寺・興福寺など南都諸寺と命運を共にするが、同時に12世紀後半時点で般若寺の存続が確認される。この他『山槐記』等も南都焼亡に関連して「奈良坂」と記されるのみである。文永4年(1267)、興正菩薩叡尊の著した『般若寺文殊縁起』(史料13)には当時礎石が残存したと記され、奈良時代の創建伝承があったと推測される⁽²⁾。

般若寺から奈良時代の古瓦が出土する事は、明治期から認識されており、保井芳太郎の採集品は福山敏男が注目して、「東大寺興福寺類似の瓦」であることから般若寺の創建は平城遷都後の事と断じた(福山1933)。古瓦類は石造十三重塔の解体修理が実施された1964年頃に改めて注目され、堀池春峰や元田長次郎によって報告されている⁽³⁾。

正倉院文書中の「般若寺」は漠然と北山の般若寺を指すという説が散見されていた⁽⁴⁾が、近年重要な考察が提示された。吉川真司は国分大般若寺ともいふべき寺院が存在したと指摘したが、本論と

密接に関わるので改めて後に言及したい。

史料2の「大般若寺」が蔵する大般若経は「黄紙黄表朱漆軸綺緒竹帙紫縁紫帯緋裏」という壮麗な装丁で天平9年3月の勅願経と考えるに相応しい。首肯されるなら般若寺の発足は天平9年頃まで遡ることとなる。正倉院文書中の般若寺を考えるにあたって当般若寺はその候補たり得るのか、出土瓦の意義を導き出してその可能性を検討する。

3. 般若寺出土軒瓦の検討

般若寺は遺跡としての実態は不明瞭である。過去に建造物指定文化財の修理等に併せて小規模な発掘調査が実施されたが、いまだ発掘調査の手法等は整備されず、出土情報など考古学的調査記録が残されていないが、軒瓦が出土した事は事実である。これまで筆者が実見して般若寺出土が確実視される資料を実測図(図1・2)と出土情報・型式の一覧表(表1)としてまとめた。

軒瓦は13点を数える。内訳として奈良時代軒丸瓦6301A1点、6235D1点、6235Ma、Mb各1点、6235Q'2点、6236E1点、奈良時代型式未設定のB176、奈良時代軒平瓦6679A1点、6732D1点がある(図1)。平安時代に属する軒丸瓦は3点あり、興福寺33型式1点、興福寺36型式(東大寺113A型式)1点、B482各1点である(図2)。

(1) 奈良時代軒瓦の検討

A. 興福寺式軒丸瓦 ①興福寺創建の6301Aは瓦当裏面には布目痕跡はなく指ナデ仕上げが見られる(古代瓦研究会2014)。①は範傷が進行しており、他の6301Aとの比較検討が可能である。範傷については現在のところ最も賛同を得ている高橋照彦の見解(高橋2009)に従うと、範傷進行5つの段階のうち①の範傷は第4段階の興福寺食堂周辺資料と同位置に確認できる。食堂跡周辺資料と比較すると、範傷の深さに差異が見られる。①は範傷の程度が浅く、進行状況から見れば先行すると考えられる。興福寺以外に6301Aが使用される例として東大寺丸山西遺跡が挙げられる(菱田2000、吉川2000)。瓦当と丸瓦の取付け位置は①が興福寺と共通して丸山西とは異なり、焼成も異なる。6301Aは興福寺中金堂(第1段階)→同五重塔北側一括・東金堂(第2段階)→丸山西(第3段階)→由義寺塔→般若寺・興福寺食堂・三面僧房跡(第4段階)→東大寺大佛殿回廊・興福寺五重塔北側一括(第5段階)と供給されたと推定できる。興福寺中金堂の創建が養老4年(720)以前、興福寺東塔は天平2年(730)、同三面僧房は天平16年(744)以前、東大寺大佛殿回廊は天平宝字元年(757)5月に建立される。丸山西は金鍾寺として有力視されており、その創建は神亀5年(728)と想定できる。菱田哲郎は丸山西の6301A-6671Bについての再検討を行い、丸山西への使用は天平2年以降一桁代までの事と指摘している(菱田2016)。丸山西6301Aは範傷第3段階で天平2年以降とまでは共通認識としてよいであろう。従って①も天平1桁代以降同16年以前となる。菱田が既に指摘したように、興福寺の主要瓦6301Aが自身の寺院造営中にもかかわらず他寺に製品を供給する事例にさらに般若寺も追加される。わずか1点の出土とはいえ、他寺での出土傾向を併せ考えると般若寺出土の意義は重要である。

表 1 軒瓦出土情報一覧表

番号	所蔵機関・整理番号	法量 (cm)	出土情報 (ラベル・墨書)	型式	年代	型式・製作技法・ 范傷の特徴	供給関係	備考
①	天理参考館 B275	瓦当直径 19.2	般若 / 天舞殿 (楼門?)	6301A	天平元年 (729) ~ 16年 (744) 以前	興福寺創建瓦、 高橋照彦范傷 4 段階以後 の新しい范傷	1 興福寺中金堂 → 2 興福寺五重塔・ 東金堂 → 3 丸山西 → 由義寺塔 → 4 般若寺・興福寺食堂 → 5 東大寺大 佛殿回廊・興福寺五重塔北側一括	保井芳太郎 コレクション
②	天理参考館 B584	残存長 12.2	般若	6235D	平城Ⅲ - 2 期 (天平勝宝元年 749 ~ 天平宝字元年 757)	東大寺式 (寺系) 珠文帯に范傷	東大寺大佛殿北回廊 → 正倉院・丸山 西 → 般若寺	保井芳太郎 コレクション
③	国立歴史民俗博物館 92	瓦当直径 18.5	般若寺?	6235Ma	天平勝宝年間 ~ 天平宝字 4 年 (760)	東大寺式 (寺系) 范傷 1 段階 (S1)	東大寺・般若寺 (S1) → 上人ヶ平 (S2) → Ma から Mb に改範 → 東大寺 (S3) → 上層頭塔・般若寺 (S4) → 上層頭塔・東大寺・下層頭塔 (S5) → 上層頭塔 (S6 ~ 10)	図録より転載
④	般若寺	瓦当直径 19.1	般若寺 / 古瓦 / 明治十二年五月三日 境内に於て掘出ス	6235Mb	平城Ⅲ期 (天平宝字 4 年直前)	東大寺式 (寺系) 范傷 4 段階 (S4) Ma → Mb は天平宝字 4 年以前に改範		般若寺蔵品
⑤	名古屋市博物館 29102 (155 - 65)	瓦当直径 19.7	ラベル「般若寺 30」 「般若寺 31」	6235Q	平城Ⅴ期 (宝亀元年 770 ~ 延暦 3 年 784) ?	東大寺式 (寺系) K と 近似する 6235 新相群	東大寺僧房、実忠別当在任中 (宝亀 11 年 ~ 延暦元年) の製作	
⑥	名古屋市博物館 29101 (155 - 10)	残存長 10.2	ラベル 「般若寺 / 6-12 / 天平」					
⑦	奈良国立博物館 504/ 考 68/33 - 30	瓦当直径 16.0	大正七年五月九日 / 般若寺西門前水道工事 / 際発見ス般若寺 / 奈良末期	6236E	平城Ⅳ - 1 期 (天平宝字元年 (757) ~ 神護景雲元年 (767))	東大寺式 (寺系)	東大寺二月堂・般若寺 → 新薬師寺 (天平宝字 6 年) → 唐招提寺	
⑧	名古屋市博物館 29301 (155 - 65)	残存幅 17.6	ラベル 「般若寺 32」	6732D	平城Ⅲ - 2 期 (天平勝宝元年 ~ 天平宝字元年)	東大寺式 (寺系)、 曲線頸Ⅱ形態	東大寺大佛殿北回廊 → 新薬師寺・般若寺	
⑨	奈良県立橿原考古学研 究所付属博物館 252	残存幅 13.6	明治四十二年 / 般若寺楼門 / 修繕 / 南柱石下二有リ朱書 「社寺技術□ / 蔵?」	6679A	平城Ⅱ - 2 期 (天平 6 ~ 17 年)	曲線頸Ⅰ形態、 唐草文間に范傷発生	瀬後谷瓦窯産、海龍王寺・法華寺	天平 8 年玄昉将来 一切経書写、「隅 院」天平 10 年、 実測図掲載不許可
⑩	天理参考館 B176	瓦当直径 14.2	朱書 「般若寺 / 三〇〇」	未設定	8 世紀代 (平城Ⅱ - 2 期以降)	単弁・複弁混成蓮華文、 中央蓮子 1+5、珠文 24、 線縮歯文、一本造成形		保井芳太郎コレク ション、平城京 6282・6284 系?
⑪	天理参考館 B482	残存長 7.2	墨書 「般若寺 / 6 10 10」	未設定	平安中期Ⅰ期 (910 ~ 973)	複弁八弁蓮華文、 平坦で幅広の直立外縁	范傷発生	保井芳太郎 コレクション
⑫	天理参考館 B551	残存長 11.0	墨書 「般若寺 / 四二月」?	興福寺 33	平安中期Ⅰ期 (910 ~ 973)	複弁八弁蓮華文、 蓮子 1+6、平坦で幅広直 立外縁、瓦当裏面布目、 丸瓦接合式、二段范型	興福寺	保井芳太郎 コレクション
⑬	天理参考館 B74	瓦当直径 16.4	朱書 「般若寺 / 昭和二、 十一、廿七 / 祀四□」	興福寺 36 東大寺 113A	平安時代後期Ⅰ期 (1040 ~ 1067) 興福寺永正元年 (1046) 後使用	複弁八弁蓮華文、 紡錘状間弁、 中央蓮子 1 + 4	薬師寺・興福寺・法隆寺・平等院鳳 凰堂・平安宮宮中真言院・円勝寺 南部系瓦屋産	保井芳太郎 コレクション

B. 東大寺式軒瓦 ② 6235D は珠文帯の范傷が進行し、4 箇所確認できる。これまで 6235D は 6235 群の中でも作範時期が遅れ、平城Ⅴ期に出現したとされた (毛利光・花谷 1991) が大佛殿回廊において 6235D は 6301A と同時に供給されることから回廊用に新たに作範されたと考えられるべきである。6235D は回廊供給期間中に製作技法の変化や瓦范の劣化が確認できる。②の丸瓦の先端は未加工で珠文帯裏辺りに接続され、かつ回廊資料よりも范傷が進行している。②は D として最も遅く製作され供給されたと考えられる。丸山西例の范傷は不明であるが瓦当厚は同程度である。従って D は東大寺回廊 → 正倉院・転害門 → (丸山西)・般若寺の順に供給されたと想定できる。

6235M は改範前後の③ Ma・④ Mb の両者が確認できる。岩永省三は Ma → Mb への改範は天平宝字 4 年 (760) 以前と推定する (岩永 2001) ので、天平宝字 4 年以前から般若寺に供給されていたと考えられる。6235M が供給される事例は東大寺東塔以外にも頭塔がある。頭塔の改範・范傷進行と比較すると、般若寺例は范傷のない Ma1 段階と Mb4 段階以降から Mb5 段階に相当する。このように東大寺・頭塔造営中に建築資材としての瓦の一部を割いて般若寺に供給していた。この傾向は 6301A と共通する。

6235Q に限りなく近似するが、外縁に沈線がなく直径が僅かに異なるタイプが⑤⑥の 2 点出土している。これを 6235Q' と仮称する。⑥は若干瓦当厚が薄い。Q 自体は東大寺での出土点数も少なく評価が定まっていないが、K とも近似する。K 自体は 6235 群の中でも新相の 3 群に位置づけられる。

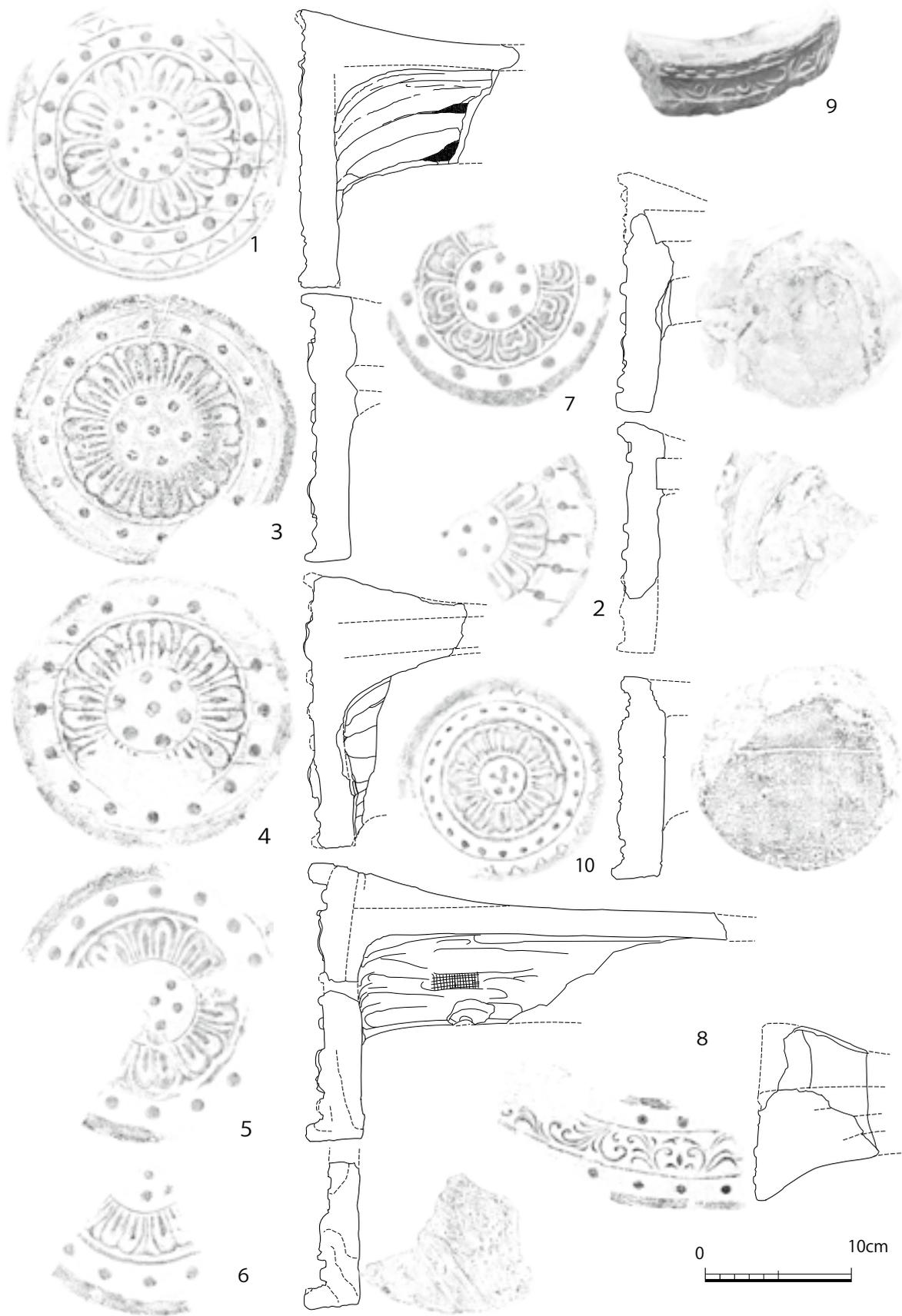


図1 奈良時代軒瓦実測図・拓影図 (S=1/4)

Qは東大寺以外に薬師寺で出土し、東大寺境内よりはむしろ寺外での出土が知られる。寡少なため年代観などは不明である。般若寺で新たにQ'を見出したが、製作技法も異なり、東大寺造営の主力の型式ではない。

⑦ 6236Eは東大寺境内二月堂周辺で確認でき、他にも新薬師寺や唐招提寺からも出土している。新薬師寺例は珠文帯辺りに丸瓦を取り付るのに対し、⑦の丸瓦は蓮弁辺りにある。丸瓦先端を片切に加工した造東大寺司造瓦所の製品で、製作技法的には⑦が新薬師寺より先行する。二月堂は天平勝宝4年(752)創建と伝えられるが実際は天平宝字6年(762)頃と考えられている。新薬師寺では創建後に中断期を挟んで宝亀年間の伽藍造営再開において6236Eが主要型式として使用され、宝亀3年(772)の総供養が行われる(島軒2012)。⑦は瓦範の状況が二月堂と同程度かと思われる。現状では東大寺二月堂・般若寺→新薬師寺→唐招提寺の供給順序が想定できる。

⑧軒平瓦6732Dは軒丸瓦6235Dと組み合う。6732Dは東大寺境内では20点ほど出土しており大佛殿北回廊に集中する。6732Dは当初から大佛殿及び北回廊に供給され続け、大量生産の結果範傷が発生・進行している。他に新薬師寺から2点出土する。顎形態は東大寺・般若寺例は顎面が極小の曲線顎Ⅱに対し、新薬師寺例は直線顎となる。6732Dは大佛殿回廊造営中にも拘わらず、新薬師寺・般若寺に供給されたが、私見では新薬師寺と般若寺では供給元の瓦工房が異なると考えられる。

C. その他の奈良時代軒瓦 ⑨軒平瓦6679Aは右半分が残存する。上外区は横長珠文帯、下外区は線鋸歯文帯で、中央から左右対称に反転する均整唐草文Ⅱ式に相当する。文様の特徴は興福寺式6671と共通する。6679Aは平城宮編年Ⅱ-2期(天平6年～天平17年)に位置づけられ、顎形態は曲線顎Ⅰで、瓦当文様から得られる年代観と矛盾ないが、⑨は上外区の珠文帯に範傷が発生している。6679Aは主に海龍王寺・法華寺から出土する。海龍王寺は隅寺とも呼ばれ、飛鳥時代に創建された。「隅院」としては天平10年(738)が初見だが、天平8年に玄昉将来の一切経が隅寺で書写されている⁽⁵⁾。般若寺との前後関係は明らかにできなかったが、軒丸瓦は同10年前後に般若寺に供給されたものと想定できる⁽⁶⁾。

⑩軒丸瓦B176は製作技法などの観点から8世紀代の蓮華文軒丸瓦とみる。範型の摩耗が進行しており、文様が判然とせず外区に線鋸歯文、やや楕円の珠文を24顆配し、中央蓮子は1+5、複弁と単弁が混合する複雑な蓮弁で未設定型式である。当型式は平城宮・京の6282或いは6284型式の影響下かと考えられるが、中房や蓮花文の文様は表出が不明瞭で全体的に平板である。粘土積上げ式の一本造り成形と考えられる。瓦当範傷が発生して進行しているものの同範を見出しがたい孤例である。

(2) 平安時代軒瓦の検討

平安時代の瓦については山崎信二が編年体系を整備しており(山崎2003)、年代観など本稿でも従う。

⑪複弁八弁蓮華文軒丸瓦(B482)は平坦で幅広の短く直立する外縁で、蓮弁は短く内区に圏線が巡らされる。下記型式に類似することから平安時代中期頃(910～973)の製作と推測する。

⑫複弁八弁蓮華文軒丸瓦(B551)は興福寺33型式で興福寺中期Ⅰ(910～973)に比定される。

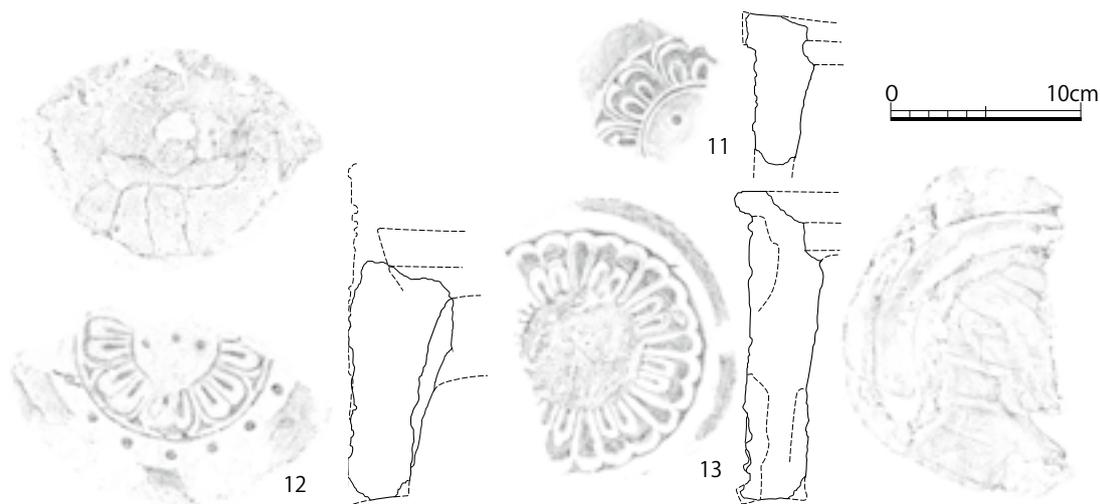


図2 平安時代軒瓦実測図・拓影図 (S=1/4)

外縁幅が平坦で幅広く、浅い段を有するので2段の範型が想定されている。製作技法的には同時期の東大寺軒丸瓦に共通しており、瓦当裏面に布目痕が残される。

⑬複弁八弁蓮華文軒丸瓦 (B74) は興福寺 36 型式 (東大寺 113A 型式) である。当資料は大和では薬師寺・興福寺に使用され、宇治の平等院鳳凰堂・平安宮真言院・円勝寺などに供給されている。36 型式は外縁の珠文帯を有さないが、本来は珠文帯を有していたものが後に切り詰められたことが解明されている。当資料は内区が表出されず蓮子が不明瞭なので改範された可能性がある。改範以前の資料は興福寺回廊から出土している。平安時代後期 I 期 (1040 ~ 1067) に属し、興福寺の永承元年 (1046) 焼土層以後の出土なので、それ以降に限定される。

これら 3 点の軒丸瓦は興福寺・東大寺と共通する南都系瓦屋から供給された。11 世紀後半まで定期的に般若寺に供給され伽藍補修が行われていた。般若寺の地は地理的にも南都圏内に入り、南都系瓦屋から供給されたが、それ以上に東大寺興福寺と密接な関係が継続されていたと考えられる。

4. 般若寺出土軒瓦の意義

以上のように般若寺では奈良から平安時代にかけての軒瓦が確認できるが、奈良時代の瓦はさらに興福寺系・東大寺系に分類できる。興福寺 6301A と 6679A は同時期ではあるが、組み合う前例はない。6301A が他寺で使用される意義については丸山西と同等であろう。東大寺系は 6235Ma・Mb と 6235D+6732D・6235Q・6236E の 2 時期に細分できる。興福寺系の後に東大寺系が使用されたとみられ、東大寺系の後半期に増大する。般若寺の造営は 6301A 範傷 3 段階 (天平 2 年以降 16 年以前) には行われており、天平宝字 4 年前後をピークとして、宝亀元年 (770) 頃にも造営が継続されたと考えられるが、補修瓦の可能性もある。造営機関は興福寺造営機関から造東大寺司へと交替したと考えられる。

造営機関が交替する同様な古代寺院は 6301-6671 から 6282-6721・6235 系へ変遷した丸山西遺

跡即ち金鍾寺がある。興福寺式が採用された理由を吉川真司は聖武天皇発願に対して造営官司である造山房司は興福寺造営機関（造興福寺東金堂司的な存在）を取り込んだ結果であるとする⁽⁷⁾。

東大寺以外で寺系東大寺式軒瓦が主要瓦として採用された事例として新薬師寺が挙げられる。新薬師寺では天平 17 年（749）金堂創建に 6301I-6671J（私見として造東大寺司系興福寺式と呼ぶ）、天平宝字 6 年（762）頃の修造として塔・仏殿・僧房等に 6235G-6732Fb、6235Ma-6732A、6234Aa-6732D が使用され、宝亀 3 年（772）総供養までに 6236E が使用される（島軒 2012）。新薬師寺例は実際は造東大寺司造香山薬師寺所によって建造される。正しく造東大寺司の所管で、般若寺と共通性が高い。このように他に類をみない軒瓦組成からみれば丸山西遺跡と大局的に共通する般若寺の特異性が浮上する。造営機関交代後の軒瓦の状況は新薬師寺に近いとみて良い。

般若寺では平安時代にも一定の軒瓦が出土しており、その供給期間は 11 世紀後半に及ぶ。8 世紀後半以降の瓦の存在から 8 世紀半ばの以降 11 世紀後半まで般若寺伽藍が維持存続されたことになる。

5. 平安時代の般若寺

出土軒瓦から得られた歴史観は如上だが、東大寺東南院に蔵される東南院文書中の第 3 櫃 41 巻には「山城國宇治郡家地等賣買寄進券文」（『東南院文書之二』564）がある。当文書は散逸防止のために成巻されたもので、その中でも般若寺と関連する史料を 4～6 として示す。

史料 4 によると宝亀 11 年（780）に能登内親王の品田 1 丁分地子 4 斗が般若寺に施入された。能登内親王は光仁天皇皇女で母は高野新笠。初見は『続日本紀』宝亀元年（770）10 月甲子条で、天応元年（781）2 月 17 日に 49 才で薨し、一品を追贈された⁽⁸⁾。能登の所生は五百井女王と五百枝王がいる。夫の市原王は造東大寺司長官も務めた造営官僚である。能登の施入は逆修供養料か夫の追善供養であろうか。史料 5 には能登の家産等を相続した娘の五百井女王が弘仁 6 年（815）10 月 25 日に、改めて遺志によって般若寺に 1 カ年の地子代を施入したと記す。33 回忌を過ぎてはいるが、追善供養と考えられる。五百井女王も同 8 年 10 月に薨去した⁽⁹⁾ので、以後施入は途絶えたのであろうか。この般若寺は東南院文書に所収される以上は東大寺関連の寺院、子院と見做されていたことになる。この般若寺に対する認識は五百井女王家側では「般若寺」と記し、寺家側では「般若院」と記す。史料 6・7 中の「般若院佛御供養料」の三道のうち一道が史料 6 と一致する。史料 5 と史料 6・7 の連続性からみれば般若院と般若寺は同一寺院となる⁽¹⁰⁾。『東大寺要録』中には東大寺子院の般若院について記載が見られる（史料 9）が、佛像は戒壇院に移置し、宝物を政所の一倉（印藏か？）へ遷したとされる。この記述から『東大寺要録』の撰述の一点を嘉承元年（1106）7 月頃に置いても、既に般若院は無住状態か荒廃して什物管理ができなかった。同書に記載された子院「般若院」と北山般若寺とが同一寺院か否かは更なる追求が必要である。

6. 結語

以上まとめると、般若寺の造営には興福寺と東大寺の二系統の造寺機関が関与していた。軒瓦の組

成・年代から興福寺造営官司の後造東大寺司が引き継いだことになる。造営継承後は一貫して造東大寺司が営繕を担った。平安時代に入っても瓦などの建築資材の供給を造東大寺所から受けていた。

丸山西（金鍾寺）・東大寺・興福寺・新薬師寺といった国家枢要寺院が陸続と建立される最中にも拘わらず同時並行的に般若寺も建設が継続されたことの意義は重い。興福寺と東大寺の軒瓦が連続する例は僅か丸山西遺跡のみで、金鍾寺と比肩すべきほどの重要な官寺が逸名寺院とも考えにくい。般若寺は同地において8世紀半ばから11世紀後半まで存在していた。般若寺の断絶はなく、その名称は8世紀半ばまで遡及させて良く、写経所関連文書中の「般若寺」「大般若寺」こそが当般若寺であったと言えよう。治承4年には般若寺が焼盡するが、文永4年段階にはなおも礎石が残存していた。

吉川真司によると、国分寺政策の起点は諸国に釈迦三尊像造顕と大般若経書写を命じた天平9年(737)3月詔にある。この時大般若経を典拠とする「国分大般若寺」が構想されていたと想定している。天平13年(741)2月の国分寺建立の詔発令において金光明最勝王経を典拠とした「国分金光明寺」の建立が命ぜられたが、前後両者の間に思想転換・断絶があった。そして史料1～3中の「般若寺」との関連を示し、(吉川2011b)の註39においてこの大般若寺が本稿で考察対象とする北山の般若寺に関わる可能性を慎重に指摘した。国分金光明寺建立が宣言された後大養徳朝では天平14年秋に金光明寺が発足した。大和国分寺は天平15年春に始動したが、吉川はこの段階で国分寺構想が聖武天皇と直結した事によって良弁の台頭があったと説いている。その理由の一つは「天平9年夏以降に猛威を振るった天然痘に対して大般若経では功德なく、最勝王経が験を奏した。」(吉川2011b)ことによる。しかし国分寺の根本経典から外れても大般若経自体の価値が低下したのではない。金光明寺にも大般若経は安置され、天平13年以降も依然として大般若経は書写される。而後の折りに触れての官寺での祈祷では同経が転読され、現代に至るまで転読は継承される程の功德がある。

能登内親王が帰依した般若寺を北山般若寺とする確実な史料はないものの、同時代の他の般若寺との関連性をむしろ見出せない。能登と般若寺の関係は不明だが、市原王の存在も視野に入る。

以上般若寺から採集された軒瓦と史料をつなぐ危うい行論となった。今後発掘調査によって確実な資料が提示されれば本論も不要となろうが、古代寺院政策研究の一試論となれば幸甚である。

本論は学位請求論文(本学)の一部を加筆・修正した。主査菱田哲郎先生、副査横内裕人先生・岸泰子先生には始終にわたってご指導頂いた上で成し得た事を末筆ながら深謝申し上げ、菱田哲郎先生の御退官を宣勞申し上げ、さらなるご発展を祈念して已みません。

掲載を許可された各所蔵機関と調査に協力して頂いた皆様に末筆ながら感謝申し上げます。

掲載許可機関、個人：奈良国立博物館・奈良県立橿原考古学研究所附属博物館・名古屋市博物館・天理参考館・般若寺、岩戸晶子・岡本弘子・故梶山勝・北井俊明・菱田哲郎・藤原郁代・横内裕人(敬称略)

註

(1) 古代において「般若寺」は飛鳥池木簡に登場し、大和国の片岡尼寺の法号である般若寺や山城国の嵯峨

般若寺がある上に、正倉院文書中の般若寺は比定できていないので呼称の上で混乱を生ずる可能性がある。本稿では考察対象の寺院を断らない限り「般若寺」と呼び、他寺との比較が必要な場合は「北山般若寺」と呼称する。

- (2) 同書には「件寺聖武天皇之草創。觀賢僧正遺跡也。星霜頻移梵宇空遺礎石。」と記され、「觀賢僧正遺跡」は『奈良坊目拙解』で誤認として指摘されたが、この縁起を根拠として近世の諸文献は般若寺を聖武創建としたと考えられる。その一つの『和州寺社記』は信憑性に疑問があるものの「十三重石塔は聖武天皇が建立し、その地下に大般若経を納めた。」との寺伝を収録する。
- (3) 堀池 1964b 文献。堀池は奈良時代の般若寺は片岡の般若寺を指すと断言するものの、正倉院文書中（史料 1～3）に頻出する「般若寺」は片岡の般若寺を指すとも明言していない。天平 14 年頃から史料に登場する般若寺では三綱が存在し、写経の手本・校本となるような正確な經典が収集されていたことになるので既に寺院として機能していたことになる。
- (4) 例えば（橋本・山岸 1987）、（金田・田島 1996）など。橋本・山岸は「天平 14 年以前の創建で金光明寺と交渉があり、ある程度以上の規模の寺」と想定した。慧眼である。
- (5) 『正倉院文書』7-24「大宝積經十二帙一壺百廿卷。〈黄紙及〉用二千二百卅二 / 右經。宮一切經内寫。」と記される。
- (6) 『続日本紀』卷第 13 聖武天皇天平 10 年（738）3 月 28 日条に「隅院食封一百戸。」とあり、これを財源として 6679A 等の瓦を補修した可能性を考える。他に同年 8 月の「経師等造物并給物案」『正倉院文書』7-184（續々修 43-1 裏）中に「隅院写大宝積經一百廿卷」とあって写経事業が進められた中でも大般若経を優先する傾向がある。
- (7) 吉川 2011b で想定された「造興福寺東金堂司」に相当する。
- (8) 『続日本紀』卷 36 光仁天皇天応元年（781）2 月丙午条
- (9) 『日本紀略』前編 14 嵯峨天皇弘仁 8 年（817）丙寅条「尚侍從二位五百井女王薨。」
- (10) 解釈について横内裕人先生にもご指導・ご教示頂いた。

参考文献

- 岩永省三 2001 「第 VI 章考察 4 屋瓦」『史跡頭塔発掘調査報告』奈良文化財研究所
- 岡崎讓治 1964 「般若寺の舍利厨子」『奈良県観光』第 95 号 奈良県観光新聞社
- 奥村茂輝 1996 「木津川瀬後谷瓦窯の操業に関する一考察軒瓦の分析から」『京都府埋蔵文化財情報』第 62 号 5（財）京都府埋蔵文化財センター
- 奥村茂輝 1998 「梅谷瓦窯の操業開始年代」『帝塚山大学考古学研究所報告』I 帝塚山大学考古学研究所
- 奥村茂輝 1999 「創建期興福寺の瓦生産」『瓦衣千年—森郁夫先生還暦記念論文集—』森郁夫先生還暦記念論文集刊行会
- 奥村茂輝 2004 「造東大寺司造瓦所と瓦屋」『MUSEUM』第 593 号 東京国立博物館
- 奥村茂輝 2008 「平城京造営時における瓦生産」『考古學雑誌』第 92 卷第 4 号 日本考古学会
- 奥村茂輝 2013 「奈良時代における興福寺の造営」『南都佛教』98 号 南都佛教研究会・東大寺
- 金田章裕・田島 公 1996 「6 越中 a 越中国砺波郡東大寺領莊園図石粟村・伊加流伎（伊加留岐村）・井山村・片名蛭村」『日本古代莊園図』東京大学出版会
- 梶山 勝 2006 『大和古瓦図版目録』名古屋市博物館資料図版目録 7 名古屋市博物館
- 木本好信 2021 「市原王と能登内親王の婚姻」『奈良平安時代史の諸問題』和泉書房

- 小林 剛 1964 「般若寺と叡尊」『奈良県観光』第 95 号 奈良県観光新聞社
- 小林 剛 1966 「般若寺の鎌倉再興について」『大和文化研究』第 11 卷 3 号 大和文化研究会
- 古代瓦研究会 2014 『古代瓦研究VI—大宮大寺式・興福寺式・鴻臚館式軒瓦の展開—』奈良文化財研究所
- 古代瓦研究会 2018 『古代瓦研究VIII—東大寺式軒瓦の展開—』奈良文化財研究所
- 柴原永遠男 2003 「福寿寺と福寿寺大般若経」『奈良時代写経史研究』塙書房
- 島軒 満 2012 「総括」『新薬師寺旧境内—奈良教育大学構内遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書』奈良教育大学
- 高橋照彦 2003a 「東大寺前身寺院に関する試論」『奈良国立博物館研究紀要 鹿園雑集』第 5 号 奈良国立博物館
- 高橋照彦 2003b 「平安京近郊の緑釉陶器生産」『古代の土器研究 平安時代の緑釉陶器—生産地の様相を中心に—』
古代の土器研究会
- 高橋照彦 2009 「考古学からみた法華堂の創建と東大寺前身寺院」『東大寺法華堂の創建と教学』ザ・グレイトブ
ダ・シンポジウム論集第 7 号 東大寺
- 高橋照彦 2010 「東大寺の成立過程と法華堂」『待兼山考古学論集Ⅱ—大阪大学考古学研究室 20 周年記念論集—』
大阪大学考古学研究室
- 田中重久 1933 「般若寺草創攷」『歴史地理』第 61 卷第 6 号
- 奈良県文化財保存事務所編 1965 『重要文化財般若寺塔婆修理工事報告書』奈良県教育委員会
- 奈良県文化財保存事務所編 1973 『重要文化財般若寺経蔵修理工事報告書』奈良県教育委員会
- 奈良県文化財保存事務所編 1995 『唐招提寺防災施設工事・発掘調査報告書』唐招提寺
- 奈良県文化財保存事務所編 2000 『東大寺防災施設工事・発掘調査報告書 発掘調査篇』東大寺
- 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 1998 「葛城・吉野・東山中の寺院」『飛鳥・奈良時代寺院出土の軒瓦 大
和考古資料目録第 23 集』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
- 橋本聖圓・山岸常人 1987 「6, 般若寺」『法華寺と佐保佐紀の寺』日本の古寺美術 17 保育社
- 馬場 基 2003 「創建期の興福寺」『奈良歴史研究』60 号 奈良歴史研究会
- 菱田哲郎 2000 「東大寺丸山西遺跡出土の瓦について」『南都佛教』78 号 東大寺・南都佛教研究会
- 菱田哲郎 2016 「東大寺丸山西遺跡と興福寺式軒瓦」『東大寺の新研究 1 東大寺の美術と考古』法蔵館
- 福山敏男 1933 「般若寺の創立に関する疑問」『歴史地理』第 62 卷第 5 号
- 堀池春峰 1964a 「造東大寺瓦屋と興福寺瓦窯址」『日本歴史』第 197 号 吉川弘文館
- 堀池春峰 1964b 「般若寺創立の疑問」『奈良県観光』第 95 号 奈良県観光新聞社
- 村野 浩 1964 「般若寺の彫刻と十三重石塔の納入品について」『奈良県観光』第 95 号 奈良県観光新聞社
- 毛利光俊彦 1992 「平安時代における東西伽藍の修造」『法隆寺の至宝—昭和資財帳—』第 15 卷 小学館
- 毛利光俊彦・花谷 浩 1991 「第VI章 考察 1 屋瓦」『平城宮発掘調査報告XⅢ—内裏の調査Ⅱ—』奈良国立文化
財研究所
- 山崎信二 1980 「大和における平安時代の瓦生産」奈良国立文化財研究所学報第 38 冊『研究論集VI』
- 山崎信二 2003 「大和における平安時代の瓦生産（再論）」『古代瓦と横穴式石室の研究』同成舎
- 吉川真司 2000 「東大寺の古層—丸山西遺跡考—」『南都佛教』78 号 東大寺・南都佛教研究会
- 吉川真司 2011a 『聖武天皇と仏都平城京』講談社
- 吉川真司 2011b 「国分寺と東大寺」『国分寺の創建 思想・制度編』吉川弘文館

参考史料 ※◇内は割書、／は改行、―は筆者加筆、異筆は異字体

【史料1】「金光明寺寫經所牒」『大日古』二・一三三(統修別集七)

金光明寺写一切経所 牒般若寺三綱所

般若四十帙(第四)五十三帙(第三)合貳卷

右、為本楷改。奉請如前。

天平十四年十月三日高屋赤麻呂

受修淨

【史料2】「寫經所大般若經本奉請文」『大日古』八・四五八(統々修四帙二〇)

西宮奉請大般若經本三百卷(自初至卅帙)／帙卅枚。大般若寺經者。

黄紙黄表朱漆軸綺緒竹帙紫縁紫帶緋裏

付使舍人鳥取眞山 以六月十七日返納。知古万呂

天平十六年四月十六日知葛野古万呂

令史小野朝臣

田邊史當成

又奉請大般若經本三百二卷

三百卷自四十帙至六十帙卅帙(但紙并帙等上与同)。

二卷(一、第二帙第二卷。／一、廿九帙第一卷)並先奉請三百卷内留者。

請使鳥取眞山

天平十六年六月十七日葛野古万呂

令史高屋連

石寸鷹万呂

十八年四月十九日返大般若經合三百一卷(唯今遺廿九帙第一卷。／見三百一卷返

了)。

返上鳥取眞山

受人阿刀足嶋

以前、以十九年正月十五日。奉返本寺院既訖。付來使丹波益國并專使舍人荒田并

鳥甘。

酒主

※吉川真司の補訂に従う。字体が異なる部分は異筆、以下同じ

【史料3】「仁王經疏本請帳」『大日古』二・一八一(統々修九帙四)

(題籤)「自處々請仁王請疏本」

以勝寶二年四月二日請仁王經疏上下並二卷

右、自行仙師所請。使調咎万呂。

亦以同日自般若寺請中卷。使調咎万呂。

已上卷者以五月廿日付行仙使奉返已訖(知鴨筆)

四月四日自佐保宮請仁王經疏六卷(三卷色紙青書軸／中卷表紙穢／三卷白紙紫檀軸)

知史生阿刀 受筆

【史料4】「五百并女王家般若入狀」『東南院文書之二』第三櫃第四十一卷 (五六四) p408

(平安遺文〇三九)

(尚)

□侍從二位五百并女王家

白米肆斛

(右?)

□故能登内親王。去宝龜十一年。以品田志町地子。奉入般若寺佛御供養料。而

志忘漏。未奉其美。仍今追一箇年之地子代奉入如件。

弘仁六年十月廿五日少書吏大初位下杖部路忌寸道磨

大書吏從八位上蘭人首

家從正八位上祝部茂磨

家令從六位上大原史繼吉

【史料5】「五百并女王家般若寺佛供養料施入狀」『東南院文書之二』第三櫃第四十一卷 (五六四) p408 (平安遺文〇三九)

(五六四) p408 (平安遺文〇三九)

尚侍從二位五百并女王家

奉上物參種

白米伍斗

塩志籠

隆平永賣

雜海藻志折櫃

雜海藻志折櫃

雜菜直

新錢志伯文

般若寺佛御供養。自今日始可貢。然遣春米未運進之間。且奉上如件。

弘仁六年十月卅日

使家令從六位上大原史繼吉

【史料6】「東大寺三綱可信連署般若院供養料物狀書請納狀」『東南院文書之二』第三櫃第四十一卷（五六四）P409（平安遺文〇四〇）

東大寺

請納奉入般若院佛御供養料物狀事

合參道

一道 奉入墾田二町并白米十斛狀

一道 奉入白米肆斛狀

一道 天和國十市庄越中國礪波郡杵名蛭庄長給符狀船木弟虫

一道 白米伍斗・塩壹籠・雜海菜壹折櫃・雜菜直新錢壹伯文

右四種物。自今月卅日始。庄春米未運進之間。且可供養狀。

以前。奉入般若院佛御供養料狀如件。

弘仁六年十月卅日少都維那住位僧使

都維那住位僧壽常
少寺住位僧玄福

別當大法師位

上座法師位勝猷

寺主大法師位伍淨

可信法師

可信滿位僧伍耀

可信滿位僧

可信住位僧勲欽

※囲線は省略した

【史料7】「般若院參向東大寺衆僧父名」『東南院文書之二』第三櫃第四十一卷（五六四）

P411（平安遺文〇四一）

東大寺尚使奉納功德分（五百井内親王）

般若院參向衆僧事

合一十人

大法師安禎呪願 僧勤坐導師

大法師慈冠 大法師施忠

僧安稱 僧慶悠 僧理惠

僧參哲 僧明宣 沙弥延壽

右。今月卅日見參如件。

弘仁六年十月卅日少寺住位僧玄福

上座法師勝猷 都維那住位僧壽常

寺主大法師

【史料8】『三代実録』貞觀五年（八六三）九月条

廿六日。乙卯。下。知大和。国云。添上郡般若寺近側山十町之内。勿令百姓伐損上。

【史料9】『東大寺要録』卷四「諸院章第四」

一、般若院

件院。佛像等移。置戒壇院。寶物遷。殿政所奉行一倉者。

【史料10】「僧祐善田地売券」『平安遺文』二六七五 久安五年（一一四九）

在大和国添上郡東大寺般若道坂下

四至 限東四丈田 限南道

限西御墓堂 限北山

【史料11】『平家物語』卷五 奈良炎上

「夜いくさになて、くらさはくらし、大將軍頭中將、般若寺の門の前になつたて、「火をいだせ」との給ふほどこそありけれ、平家のせいになかに、播磨国住人福井庄下司、二郎大夫友方といふもの、たて（盾）をわりたい松にして、在家に火をぞかけたりける。」

【史料12】『平家物語』卷一 重衡被斬

「其頸をば、般若寺大鳥居のまへに釘つけにこそかけたなりけれ。治承の合戦の時、ここにうたて伽藍をほろぼし給へるゆえなり。」

【史料13】『般若寺文殊縁起等』

（前略）終擇得南北往還之頭。敬安置般若伽藍之勝地。伴寺聖武天皇之草創。觀賢僧正遺跡也。星霜頻移。梵宇空遺礎石。春秋屢改。佛像早變灰燼。野干卜居。古墓成列。敬重伽藍。有名無実。於是有一大善巧一人。時含懷旧之悲。終起興隆之願。時將立三三三重石塔婆。且重砮初重之大石。其願未成就。其身命過。爾後一人禪侶卜居於彼砌。亦勸彼遺跡。已果彼大功。